

アンブローズ・ビアスの未来幻想



巻頭言

里内克巳*

Ambrose Bierce's Visions of the Future

Key Words: Ambrose Bierce, United States of America, Science Fiction, Technology, Political Satire

この原稿を書いているのは2026年7月4日で、日米の時差を考慮に入れなければの話だが、アメリカ建国250年を記念する日である。だが現在の合衆国は、共和党・民主党の間の政治的な亀裂が深まり、議会での議論を無視して大統領が対外的な戦争を仕掛けるなど、民主主義の鑑とはお世辞にも言えないような国家に変質している。社会的な分裂もこれまでになく露わになっており、お祝いをする気分にならない人も多いだろう。第二次大戦後、アメリカ合衆国を手本として民主制度を築き上げてきた日本にとっても、この混迷ぶりはゆゆしき事態である。

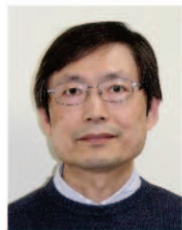
ところで、今から百年以上も前に、アメリカの民主主義的な社会のあり方に皮肉な目を注いだ文学者のひとりにアンブローズ・ビアス(1842-1914?年)がいる。日本では、芥川龍之介が随筆「天心」のなかで絶賛したのが一般への紹介の端緒となり、以後、多くの作品が翻訳・紹介されてきた。オハイオ州生まれのビアスは若い頃に志願兵として南北戦争に従軍したことがあり、その体験を生かした「アウルクリーク橋の出来事」「チカモーガ」など、幻想と恐怖を基調とした印象的な短編小説を多く発表した。風刺作家としての顔もよく知られている。長年かけて増補されていった『悪魔の辞典』はその代表作だ。辞書の体裁をもってさまざまな単語に再定義を施したもののだが、どの説明もことごとく皮肉と悪意に満ちている。独自のスタイルを持った警句集として、芥川

の『侏儒の言葉』にも大きな影響を与えた。

試みに、この『悪魔の辞典』で「共和国」(republic)を拾い上げてみると、次のような説明がある。「統治するものと統治されるものとが同一であるところから、権限を認められてはいても、任意の服従を強制するしかない国家。共和国では、公安の基礎は、文字通り統治されていたために、やむなく服従していた祖先の遺産である、次第にすたれ行く服従の習慣の上におかれている。この世にある共和国の種類は、共和国のそもそものもとである専制政治と、共和国がやがては行き着くところの無政府状態と、この二つのものの間に見られる諸段階の数に等しい」(西川正身訳『新編 悪魔の辞典』岩波文庫から引用)。

この〈定義〉は、世襲君主を置かないという共和制、そして主権が市民にあるという民主制という、二つの政治原理を是とするアメリカ合衆国の在りように対する痛烈な皮肉となっている。名著『アメリカの民主主義』の著者アレクシス・ド・トクヴィルのいう「多数の専制」に流されず、市民が自らを律して正しい判断をもって政治を行うことの困難さ。専制政治とアナーキズムという二極の間でどうにか釣り合いをとろうとする合衆国の足取りのおぼつかなさ。そうしたものを、ビアスは短い文章の中で浮かび上がらせている。国家が分裂して血みどろの争いを繰り広げた戦争を自ら体験した作家ならではの観察眼が感じられる。

このような合衆国の行く末に対するペシミスティックな見立ては、小説作品にも反映されている。あまり知られていないことだが、ビアスは1880年代後半からSF的な発想の作品を発表するようになった。彼が活躍していた時代の欧米では、電話機、蓄音機、映画、無線電信、飛行機などが次々と登場するなど、目覚ましい科学技術の発展が人々の暮らしを大きく変えていったことを考えれば、これは自然



* Katsumi SATOUCHI

1963年10月生まれ
京都大学大学院 文学研究科 英語学英米文学専攻修士課程修了(1989年)
現在、大阪大学大学院 人文科学研究科長教授 論文博士(文学)
TEL: 06-6850-5878
E-mail: satouchi-k.hmt@osaka-u.ac.jp

な成り行きといえる。だがピアスは、同時代の〈文明〉の飛躍的な進展を楽観視せず、むしろ懐疑を抱いていた。たとえば、チェスを自在に指すことのできる自動人形が登場する短編小説「モクソンの主人」は、現代の自律学習型AIの登場を予言するかのような作品であるが、その人形はやがて〈主人〉であるはずの開発者を凌駕し、破滅へと追いやる。また、掌編「散り散りに」は、煙も音も出ない銃が開発されることによって文明が崩壊する様を描き出している。消音銃の普及により、誰もが簡単に恨みを持つ者を殺害することができるようになる。その結果、人々は都市での集団生活から逃走し、森の中で一人一人が孤立した暮らしを送ることで野蛮化していくという次第。

とはいえ、社会崩壊の悪夢を紡ぐ作家としてのピアスは、テクノロジーの進展がもたらす負の影響よりも、アメリカという国家がそもそもの拠りどころとしている統治原理自体の脆弱さの方に、よりこだわり続けた節がある。彼が書いたSFと風刺の入り混じった作品の多くは、はるか未来の歴史家が、遠い過去に栄えそして滅び去ったアメリカ合衆国について解説する、という体裁をとる。たとえば「共和国の崩壊」は、31世紀の君主制国家に生きる某歴史家が、はるか昔に滅亡してしまった合衆国の歴史を

振り返る論説、という設定の作品だ。多数決という原理への盲従や、世論を過度に重んじる傾向などが、アメリカ社会をアナーキズムへと導き破滅させていく過程を描き出している。それを後年に増補改訂した作品「灰になったかがり火」は、西暦4930年（！）に書かれた歴史書の体裁をとる。ここでは国名も都市名も表記が崩れ、歴史的出来事もでたらめに混ぜ合わされ、過去の忘却の度合いがより強められている。

「灰になったかがり火」で列挙されるアメリカ合衆国崩壊に至る要因の数々は、21世紀を生きる私たち読者にとっても身につまされるものがある。外国勢力に付け入る隙を大いに与える〈言論の自由〉の脆弱さ。金権主義によるモラルの腐敗。ひと握りの富者と圧倒的多数の貧者へと二極化した社会。賢人に政治を委ねず、多数派や大衆に信を置きすぎたがために機能不全を起こした政府、などなど。ピアスはごく近い将来に起きるかもしれない社会崩壊のビジョンを、はるか遠い未来からの視点を借りて皮肉に描き出した。いま現在、そうした作品を荒唐無稽なたわごとと一笑に付すことができないのは、この作家の人間や社会や歴史に対する透視力を証するものだろう。

